



小林一茶の生涯と俳諧論研究

著者	中田 雅敏
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2016
報告番号	12102乙第2799号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00147517

氏 名	中田 雅敏
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 記 番 号	博 乙 第 2799 号
学位授与年月日	平成 28 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	小林一茶の生涯と俳諧論研究
主 査	筑波大学 教 授 文学博士 佐藤 貢悦
副 査	筑波大学 准教授 博士（文学） 巖 錫仁
副 査	筑波大学 准教授 博士（学術） 平石 典子
副 査	都留文科大学文学部 名誉教授 博士（文学） 関口 安義

論 文 の 要 旨

本論文は、一茶の家族関係や葛飾蕉門での位置に焦点を当てながら、信濃文化との関わり、「日の本」という意識、農事俳句、俳句における方言使用、自身の信仰心、蕉門内での軋轢と苦悩、さらには家庭を築いたことによる新たな俳風の創出、明治末期における一茶の再発見、そして一茶像の成立といった過程について、今日に伝わる一茶に関連の歴史資料をほぼ駆使しながら、さらにはみずから一茶縁の地に足を運ぶといった入念な調査結果をも踏まえて、一茶の生涯と俳諧論について丹念に分析したものである。本論文の著者中田雅敏氏自身が俳人でもあり、同氏にはすでに『漂泊の俳諧師 小林一茶』（角川書店、2009）という著作があるが、本論文は、これに大幅な加筆を加え内容を深めることで完成にいたったものである。

本論文は、序章と終章を含む全十二章から構成されている。序章においては、本論文の目的とその構成が述べられている。

第一章で筆者は、一茶が江戸の庶民生活から何を身につけたかについて『世事見聞録』『御触書集成』などを通して検証し、さらに葛飾蕉門への入門とその人間関係における一茶について考察している。その副題に「小林一茶とその時代」とあるように、江戸後期、全国的に俳諧熱の高まる時代に生を受け、俳諧に生きようとする一茶の姿が巧みに描かれている。そのなかでも、武陽隠士の『世事見聞録』に関する分析は、きわめて説得的かつ創見に富むものであり、筆者は中村敲石（知足）こそ『世事見聞録』の著者武陽隠士であったという。

第二章で筆者は、一茶俳諧の特徴として知られるところの童子（童児）と動物を詠んだ句が多いことを取り上げ、彼の生まれ故郷信州柏原の文化とそこでの幼少期の生活、老いて家族をもったこと、愛児を失った親の悲しみについて論究し、さらにはそうした記述の中に一茶の識字および文章鍛錬の過程をも織り込んでいる。

第三章で筆者は、一茶の「日の本」（日本国）という意識について考察した。筆者によれば、一茶は、文化・文政期までに北海道を除いて、ほぼ日本全土を漂泊・放浪した。幕藩制下においては、いまだ必ずしも成熟していなかった「日の本」という意識が、一茶のなかにどのように生じたかについて

て論究し、蝦夷地開拓、外国船、外国の漂流民などが世情を沸き立たせるといった時代背景があつて、それが世情に敏感な放浪の詩人一茶に「日の本」意識をもたせたのだというきわめてユニークな指摘を行っている。

第四章で筆者は、一茶稿本『志多良』と関連して、農事俳句について考察した。筆者によれば、一茶は、生涯を通じて直接には一度も農事に関わらなかったが、それは無関心や傍観者的な立場をいうものではない。故郷定住後に多く見られる農事俳句は、一茶の百姓としての意識を露わにするものであり、故郷定住後の一年間の手記である『志多良』は、定説となっている「しだら」としての「ていたらく」の意味ではなく、「したら」であつて、豊作を祈願する志多良神への奉祀や褒詞の意が含まれた言葉である。このことを、筆者は『志多良』に所収の句や書き置きその他関連資料に関する検討を通して詳細に論じている。

第五章で筆者は、一茶俳句の方言使用について論じた。筆者によれば、一茶の生きた時代は、国学の隆盛に伴い、日本語への関心が大いに高まり、そうした背景もあつて一茶は、俳句のなかに地方語や方言を積極的に取り込んだ。筆者は、一茶が長い放浪生活から各地方の方言を採録した『方言雑集』の語彙や語意を詳細に検討し、それらの俗語や方言を使って詠んだ俳句を取り上げ、方言俳句の祖といわれながらも、実際には研究者の間においてあまり注目されていない一茶俳句の方言使用について、独自の知見を織り交ぜながらその意義を論じた。

第六章で筆者は、一茶の家族と子どもへの愛を、一茶の信仰心を通して考察し、善光寺縁起や浄土真宗、説経節との関わりを検証し、そうした信仰心にもとづく愛情発露の感情について論じた。

第七章で筆者は、一茶の自己俳諧の確立と宗教性について論じた。筆者によれば、俳諧は、江戸期に文学性を持つに至った文芸であるいえようが、さらに進んで一茶はそれを庶民に開放するという役割を果たしたのである。その過程において、貧者や乞食の生活までも俳句に詠み、口語俳句ともいうべき領域を創出したと筆者はいう。

第八章で筆者は、俳壇の宗匠としての一茶の立場と地位について検討した。筆者によれば、江戸期の俳諧師は、師弟関係や派閥を構成し、多数の門弟を持つことで、各自の俳壇の経営を図っており、そのために、師系を誇り、庵号・園号などをもち、それを代々継承するといった営為が必要とされていた。そうしたなかで、一茶のみがこれを用いなかった。筆者は、この辺の事情について、十四歳の江戸奉公時代から五十一歳の帰郷とその後の生涯をもう一度丹念に検討しながら、江戸で宗匠になれないとすれば、信濃の田舎で一座を開こうと決意したものと解釈している。こうした行動は一茶が初めてであり、結果的に俳諧の地方への普及という点で革新的な意味を持っていたと筆者は述べる。

第九章で筆者は、武蔵国方面における一茶の事跡と、葛飾派との決別、故郷定住への決意について論じた。筆者によれば、一茶が所属していた葛飾派の掌握範囲と武蔵国における俳諧分布、さらには一茶の指導範囲を検討したところ、一茶が葛飾派を脱して信濃に自己の一派を興した経緯は、地方経済の発展に関わりが深かった。より具体的にいえば、地方経済の発展が地方における識字率の上昇を促し、そのことがさらに学問への情熱の高まりを生んだという。こうして一茶は、俳諧を地方へと階層を超えて普及させることになる、そのさきがけとなったと筆者は述べる。

第十章で筆者は、戦前の修身教科書と信濃教育会にみる一茶像について検討した。筆者によれば、後生において芭蕉、蕪村と並び称せられることになるが、江戸期を代表する三人の俳諧師のなかで、一茶の作品が教科書に最も多く採録されている。筆者は、信濃教育会『補習国語読本』と束松露香『俳諧寺一茶』などに収録されている用例（勸農詞）を検討した。一方では、一茶という一人の俳諧師という以上に、国家による教育奨励政策に則して俳諧師一茶を教材化しようとした姿勢が窺えると指摘

する。他方で、大正時代の新教育運動の思潮に乗って、一茶の作品が教材とするに適していたこと、正岡子規の提唱した「写生文」に一茶の「俳諧寺の記」が格好の教材として選ばれたこと、そうした理由によって一茶の俳句が教科書に多く登場することとなったと筆者はいう。

終章で筆者は、この研究を通して得られた主要な知見を整理し、あわせて残されたいくつかの課題について言及した。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、著者みずからが述べているように俳諧師としての一茶の俳諧そのものを論じる、いわゆる一茶俳諧論ではない。本論文は、むしろ一茶が詠んだ数多の俳句を素材として、それらの一句一句に潜んでいる一茶の深意を探りながら、あわせて彼の生きた時代と生涯を総合的に再構成し闡明することを意図したものである。筆者の永年の研鑽と分析の成果として、とくに注目されるのが武蔵国方面における一茶の事跡、そして葛飾派との決別、さらに故郷定住への決意を詳細に分析した各箇所である。そこにおいては、従来の一茶研究において解明されたとはいいいがたい問題、すなわち『世事見聞録』の著者が中村知足であるとする論証などが展開されている。これは、まさに本論文の学界に対する大きな貢献の一つとしてあげることができよう。また、一茶が葛飾派を脱して信濃に自己の一派を興した経緯が、地方経済の発展、ひいては地方における識字率の高まり、学問への情熱のなみなみならぬ深まりと関連していたことを論述する部分においても、筆者の広範な研究の蓄積を踏まえた独創的な成果が示されている。これらと相表裏して、そうした時代的、風土的背景が、一茶の活躍する舞台を準備していたことをも闡明したことは、本論文の不朽の成果としてこれからの一茶研究に大きな影響を及ぼすものと考えられる。さらにいえば、一茶以前の俳諧師は主に都市部で活躍する人々であったのに対して、一茶は俳諧を地方に、階層を超えて本格的に普及することになるその先駆けであった。明治以降の俳諧の全国的な普及という大きな潮流は、まさしく一茶から始まったといっても過言ではなく、そこに小林一茶の再発見と一茶像の成立とがあったわけである。本研究における上記のすぐれた成果は、新しい一茶像を提示したものといえる。

そうはいっても、一茶が何故に葛飾蕉門を離れ、故郷の信州において一茶社中を興し、独特の色調をもった俳句を詠み続けたのかといった問題に関連して、放浪生活の経済的な裏付けなどの未解明の問題は残されている。解明の待たれる諸課題については、筆者の今後の研究に期待しなくてはならないが、現時点において、本論文が学界に対して少なからぬ貢献をなし得ることは間違いのないところであるといえる。

2 最終試験

平成 28 年 9 月 14 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（2）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。